

「ありがとう西高！」新聞

発行元：「ありがとう西高！」実行委員会広報室
Mail：nishikouarigatou@gmail.com
#ありがとう西高

Instagram：nishikouarigatou
twitter：@nishiko_arigato
ブログ：https://thanksomiyawest.blogspot.com/

最後の西高祭、終わる

令和元年9月13日から14日にかけて、大宮西高校として最後の文化祭が行われた。今年是在学する最後の一学年のみの文化祭となったため、例年に比べて盛り上がり心配されたが、オープニングステージから展示や昼ステージ、後夜祭まで活気溢れる素晴らしい文化祭となった。

「翔んで宮西 -最後だよ！全員集合-」

13日の校内公開では、主に模擬店の展示が行われ、お化け屋敷やアイス等が販売されていた。我々「ありがとう西高！」実行委員会もワークショップ開催やピアノ演奏など、最後の文化祭に参加した。

しかし、楽しいはずの文化祭の裏では悲しい知らせもあった。西高で20年以上に渡って勤務され、多くの生徒から慕われていた先生が亡くなったのだ。文化祭前日の、突然のことだった。生徒たちは悲しみに暮れ、涙を見せる先生方も多かった。14日の一般公開日は、正面入口に先生を偲ぶ写真が飾られ、メッセージボードが置かれていた。訃報を聞いた卒業生が14日の一般公開に駆けつけ、追悼メッセージを書く姿が多く見受けられた。

昼ステージでは部活動のパフォーマンスや有志団体によるダンスが披露されたり、模擬展示や卒業生によるピアノコンサートが行われたりした。来場者の内訳は卒業生が多く、最終回である今回は、特に幅広い年代が集まっていたようだ。中には親子二代で西高生だった、という方もいた。後夜祭の時間帯に

なると、重層体育館に生徒たちが集まってくる。例年は在校生以外の立ち入りが禁止されていた後夜祭だが、在校生が少ない事と最後だという理由から、卒業生に限り参加が可能になった。後夜祭はダンス部、有志ダンスチーム、バンド部などのパフォーマンスで大盛り上がりを見せた。そして大トリは、近年恒例であった先生バンドのヘンリークラブ。

亡くなったボーカルの先生が使ったタオルとマイクが、ステージに置かれていた。涙を流していた生徒も多かった。最後に「バンザイ-好きでよかった-」を在校生、卒業生、先生達、全員で合唱。後夜祭は幕を下ろした。

運営に携わっていた生徒会役員は「計り知れない達成感で溢れている。西高で良かった」と興奮気味に語っていた。今回のテーマ「翔んで宮西-最後だよ！全員集合-」は、多くの関係者に投げかけるテーマになっていた。これから羽ばたく西高生、それぞれの進路で飛躍する卒業生。皆がそれぞれの思いを抱き西高に大集合した。来年3月の閉校イベントも、「全員集合」となるだろうか。



最終回である今回も、大いに盛り上がっていた。

あの場所は、今 -体育館ステージ編-

西高祭にとって、体育館ステージは醍醐味の一つ。オープニング、昼ステージ、そして後夜祭を盛り上げる有志団体によるステージ企画が例年、西高生を興奮の渦に巻き込んでいる。記者の現役時代も、ステージは大きな盛り上がりを見せていた。新入生歓迎会とは少し違った雰囲気。司会のクオリティ高いネタ振りから、有志団体の発表が次々と続く。観客は、ペンライトを振りながら出演する友人の名を叫ぶ。重層体育館は、まさにライブ会場そのものだった。ステージは常連団体がいて、例えば、ダンス部やバトン部は、毎年のラインナップに名を連ね、校内のみならず校外からも注目される団体になっていた。

実際に、文化祭ステージに参加したことのある卒業生に体験談を聞いてみた。当時、運動部に所属していた彼は「部活の伝統であるから」と先輩から強制参加させられた。企画内容は、当時流行っていたAKB48のダンス。

「夏休み中しか練習ができず、部活との両立が難しかった」と当時を振り返る。とはいえ本番ステージは大成功。「最初は正直、面倒くさかった。でも、ステージ上でたくさんの歓声を貰った。あの時の昂揚感と達成感は忘れられない」という。西高祭のステージは、観客だけでなく出演者にとっても忘れられない思い出となるものだった。

今年で最後となった西高祭、ステージの熱狂は記者の在校時と変わらず、最後まで受け継がれた。この伝統も無くなってしまふのは寂しいが、ステージの強烈な経験は、西高生の心にずっと残ることだろう。(石井)

「西高の歴史」新校の生徒が研究発表

8月24日(土)、今年4月に開校した大宮国際中等教育学校で「総合的な探求の時間」の



発表は新校にある「大宮西高の記念室」で行われた。

発表が行われた。中等教育学校の先生によると、本授業ではいくつかの講座が用意されており、中でも「西高の歴史」を調べる講座は希望者が集中して、抽選になったほどの人気だったという。中学生たちは、学校見学に訪れた小学生やその保護者に「西高の歴史」を丁寧に説明していた。

大空西高伝

いつでも飛び回って行ける人生に。

瀬畑 茉有子さん（ファッションモデル）

2004年のミス・ユニバース準グランプリに始まり、近年はNIKEのグローバルキャンペーンなど、世界に活動の域を広げている瀬畑さん。西高時代に興味を持ったファッションの分野で、目の前のことに全力で飛びついて行った。いくつかの転機を経て、世界を舞台に活躍するスーパーモデルへと成長していった。後編は、西高卒業後の瀬畑さんがモデルの道を選び、活動の場を海外へと移した道筋を辿っていく。

ミス・ユニバースからモデルの道へ

専門学校の校外授業で街角のファッションリサーチをしていた際、声をかけられた相手は、当時ミス・ユニバース・ジャパンを主宰していたイネス・リグロン氏だった。

「当時、ミス・ユニバースについて正直全然知らなくて、ユニバーサルスタジオジャパンのダンサーにスカウトされたのかと思ったの」と瀬畑さんはあっけらかんと語る。

「校外授業が終わって教室に戻って、クラスメイトの詳しい人の子に聞いてみたら、すごいコンテストだと教えてもらって。とりあえずやってみようかな」と思っただけの参加。トレーニングを経て結果は、なんと準グランプリ。この結果が、モデル活動開始の足がかりとなる。それから、モデルとしての活躍が始



余談だが今回は、モデル、カメラマン、記事執筆、ともに同級生のコラボレーションだった。

まった。ファッション誌の専属モデル、テレビCM出演、舞台役者に挑戦した時期もあった。ミス・ユニバース・ジャパンに参加したのは19歳の頃。そこからの20代は、モデルとして国内で活動する日々が続いた。

そんな瀬畑さんの日々に変化が訪れたのは30歳になる頃。20代後半に参加した、ニューヨークでの撮影が大きな転機となる。

活動拠点を海外に そして、帰国。

「ナイキのグローバルキャンペーンに採用されて、ニューヨークでの撮影に参加する機会があっただけだった。最初は、ニューヨーク行けてラッキー、と単に思っただけだった。でも撮影に参加してみて、ニューヨークで活躍する有名モデルと共演して、気持ちが変わったの。今まで見たどれよりもカッコよかった。この場所で私も挑戦してみたい、と気持ちがときめいて」30歳になったことを機に、活動拠点を海外に置くことを決めた。

それから数年間は、ニューヨークとシンガポールでのモデル活動が続いた。ゼロからの

スタートだったが、現地の事務所に所属して、ニューヨークコレクションのランウェイも経験した。経済的にも現地で生活できる水準は稼げるようになっていた。しかし、2年前に帰国を決意した。「少し疲れてしまって。稼いでいるとは言っても、ニューヨークは家賃がすごく高かったし、カッコいい雑誌に出演しても、雑誌は給料ほぼゼロっていう現実も見えた」日本に戻ってきて、新しい挑戦に模索をはじめているところと語る。

思い出の舞台が なくなるのは寂しい

瀬畑さんに、西高に対する思いを聞いた。

「人生の中の大事な期間、子どもから大人に変わる狭間の舞台だった。それがなくなるのは本当に寂しい。（取材の前は）あの頃の記憶が無いと思っていたけど、話してみること色々思い出した。「あの場所」に行けなくなるのは、寂しい。いつでもどこでも飛び回って行ける人間でありたいけど、行けなくなる場所もあるんだなって」学校が無くなるまでにもう一度、訪れてほしいものだ。